

巻頭言

Preface

岸井隆幸¹

By Takayuki KISHII

この2年間、世界はCOVID-19に翻弄されてきたが、2022年2月末にロシアがウクライナに侵攻を始めてからというもの、世界の耳目は急速に東欧に注がれるようになった。昨今の新たな不安定要素はまさに地球規模で、しかも急激に展開する。社会活動の連鎖が国境を越えて広がっている証左であるし、情報が物理的距離を超えて瞬時に世界中を駆け巡るようになった結果でもある。小さな蝶の羽ばたきが竜巻を起こす「バタフライエフェクト」という洒落た表現もあるが、そこまでいかなくとも「風が吹けば桶屋が儲かる」のが社会であり、今やそうした連鎖の構造が地球規模で展開されているということであろう。

個々人はこうした社会の構造や活動の連鎖を読み解いて、自らの価値基準に照らして行動を合理的に選択するという「性善説的行動モデル」の積層として社会が動いているという理解もあろうが、実際には「大鷲の羽ばたき」によって連鎖の構造や価値基準が大きく変わるといふ事態が生じる。こうしたいわば非連続な変化が存在することを、COVID-19やウクライナ侵攻が改めて思い起こさせてくれる。

振り返れば、明治維新前後、わが国が西欧近代文明のシャワーを浴びた時も大きな非連続的变化であった。フランス人ビゴーが描いた風刺画はまさにその落差を投射している。また、第2次世界大戦前後の日本も同様である。「鬼畜米英」の関係は「基本的価値及び戦略的利益を共有する同盟国」(外務省HP)へと変わり、そして同盟の反映として多数の米軍基地を抱える沖縄は返還されてから50年の節目を今年迎えている。その立ち位置は、琉球王国、明治政府による琉球処分、熾烈な沖縄戦、戦後27年に及ぶ米国統治、そして復帰と、極めて複雑に変化してきた。当たり前だと思っていたことが実は当たり前ではない、節目となる年を迎えて見つめ直す沖縄の歴史は、このことを再認識させてくれる。

ただ一方で、社会が非連続に変化しても変わらないものもある。子供を亡くした母の悲しみは、江戸時代でも戦前でも戦後でも、アメリカでもウクライナでもロシアでも沖縄でも、しかもその理由の如何を問わず変わらない。また、誰しも恐怖を感じれば相手に対峙する姿勢を取るし、オリンピックでもeスポーツでも相手に勝つことは高揚を呼び起こす。社会構成の原単位である人間はそれほど大きく変化していないのかもしれない。人間に備えられた行動原理の中に、あるいは人間を取り巻く大きな自然界の行動原理の中に「非連続」を生み出す要素が潜んでいるのかもしれないが…。

計量計画研究所の英語名称は“The Institute of Behavioral Sciences”。どうしてSciencesと複数形なのかと以前から時々考えていた。設立時に交通、経済、防衛、言語など様々な分野を包摂するという意味を込めて複数形にしたのか、と想像していたが、最近では、個人のBehavior、社会のBehaviorの両方を対象にした研究所、社会の原単位である人間の行動とその集合体である社会の動きの両方を取り扱うからかもしれない、と思い直している。

そもそも社会は人間が形作っているものであり、その姿は「変わるもの」ではなく「変えるもの」である。我々は社会を変えるための「Institute」として「羽ばたき続けたい」と思う。

1 一般財団法人計量計画研究所 代表理事 博士(工学)